

カタカナ語と対人関係の構築と維持

—カタカナ語の果たしている役割について—

イハス・ペーテル

1. 始めに

日本語は外来語を受け入れやすい言語だといわれている。事実外来語は日本語に昔から入ってきており、現代日本語において、いわゆるカタカナ語と呼ばれる外来語は年々その数を増してきている（小林千草、2007：73－74）。カタカナ語の多用は日本人の若者の会話に顕著で、挨拶したり、判断をくだしたり、意見を述べる際にも使われているようだ。「バイバイ」や「サンキュー」から、「この本はグレートです」というケースもあるようだ。さて、このようなカタカナ語の多用だが、単にファッショナブルであるという理由だけでなく、好ましい対人関係を構築したり、そのような対人関係を維持するのに好ましいという理由もあるようだ。例えば、先の「この本はグレートです」の例だが、このような表現はむやみやたらには用いられない。このような表現は、（話者が若者であるとして）聞き手がたとえ若者であっても、面識がなければ、使われないと判断できる場合が多いからだ。

ということは、カタカナ語の使用を望ましい対人関係の維持・構築の手段として捉えることでカタカナ語の本質が見えてくるのではないだろうか。言い換えるなら、カタカナ語が織りなす「団結力」にカタカナ語の存在理由があるのではないだろうか。

2. 先行研究

さて、対人関係の構築・維持に大きな役割を果たしていると考えられるカタカナ語だが、これまでのカタカナ語（あるいは外来語）研究は、(1)意味の難解性、あるいは、(2)在来語との棲み分けという観点からのものが主流であるように思える。

意味の難解性の観点の例として国立国語研究所（2007：38－40）の調査がある。この研究はカタカナ語の難解性を使用者の年齢から調査したもので、30歳代まではカタカナ語の増加を好ましいと感じる人が多いが、40歳代以上では、好ましくないと感じる人が多いとの報告している。同様のことが小林千草のカタカナ語の使用頻度と世代間格差の研究においても報告されている（小林千草、2007：82－83）。

在来（日本）語との棲み分けという観点からの研究には国立国語研究所（2007：24－25）の考察がある。例えば、「ランプ」と「電燈」との違いの指摘がそうである。「電灯」という言葉があるのにわざわざ「ランプ」を用いることで在来語を捨てることなく「同じ」ものを新旧の観点からさし示す意味体系を作り上げているわけである。（更には「電燈」と「伝統」からくる同音異語による誤解を「ランプ」の導入が防いでくれているという指摘もなされている〔国立国語研究所、2007：22〕。）同じ脈絡で、カタカナ語は在来語の直接的表現を間接的意味合いの表現に変える働きを持つという指摘もある。例えば在来語の「強姦」にたいする「レイプ」であるとか、「家庭内暴力」に対する「ドメスティックバイオレンス」がその例である（国立

国語研究所、2007：16－19）。

棲み分け型研究の延長として、カタカナ語は新しい概念の導入の手段として機能しているという指摘もある。例えば、「ノーマライゼーション」がその例だ。障害者のために特別な学校を建てたり、建物やバスの階段の上り下りを手伝う機械を設置したりすることを「ノーマライゼーション」というのだが、無理に日本語に翻訳するより、「ノーマライゼーション」という言葉を使った方がはるかに便利だというわけだ（国立国語研究所、2007：14－16）。

これら先行研究において、対人関係構築の面からの考察もある程度は述べられている。国立国語研究所、ならびに、小林の一連の研究においては、若者層と熟年層のカタカナ語に対する反応が報告されている。例えば、熟年層は、まだ定着されていないカタカナ語を不便に感じ、若者ほど使わないが、若者はカタカナ語を便利に感じ、よく使うという指摘が時折なされている（国立国語研究所、2007：38－40；小林千草、2007：82－83）。カタカナ語に対する使用者の意識の研究は重要である。しかし、具体的にカタカナ語がどのような形で対人関係の構築・維持に関与しているのかまでは考察が及んでいない。

またカタカナ語は方言のような力を持ち、強い印象を与え、仲間意識を強化するとも言われている。広告評論家天野祐吉によると、カタカナ語はある意味で方言と同じ作用を果たしているのだそうだ。例えば東京弁の「行くべ」は標準語の「行こう」より言葉の響きが強く、「一緒に行きたい」という気分を強くあらわしているとのことであるが、そのような働きがカタカナ語にもあるのだそうだ（国立国語研究所、2007：24－25）。

カタカナ語が団結機能を持つとするなら、その機能はどのような場合に現れるのか。これこそまさにカタカナ語の核心的機能だと思われるのだが、天野はそのような問いに何一つ答えてはいない。カタカナ語がどのような意識をもって使われ、更には、どのような対人関係を維持・構築するのに使われているのか、それを探ることがカタカナ語研究の核心的部分であるにも関わらずである。

本稿の目的は、まさにここにある。カタカナ語がどのような状況で使われ、また、カタカナ語の使用によってどのような対人関係が構築され、維持されるとカタカナ語の使用者が思っているかを調査することによってカタカナ語の本質を理解すること、これが本稿の目的である。

3. 調査・研究手順

上記の目的を達成するために、本稿では、次のような方法を用いた。まず、カタカナ語使用の実態についてのアンケートを、大学生10名と30歳以上の大人10名に対して行った。二つの異なる年齢層にアンケートを行ったのは、世代によるカタカナ語の使用形態の違いを明らかにするためである。アンケートは体系選択理論のコンテキストの理論に基づいて作成し、アンケート結果の分析は同じコンテキスト理論の対人関係の観点から行い、その分析結果に基づいてカタカナ語の対人関係の構築・維持に関わる機能の推定を行った。更に、カタカナ語を機能の観点から分類し、どのような機能を持つカタカナ語が最も頻繁に用いられているかを調べ、データの最終分析結果とした。以下、体系選択理論のコンテキストの分析方法、並びに、アンケート作成の手順を説明し、その後にアンケート結果の分析を行うことにする。

4. 論理的フレームワーク

4. 1. コンテキスト

コンテキストというのはテキストの意味が理解される環境であり、テキスト生成に関わる素材を提供する場を意味する (Halliday and Hasan, 1985 : 11)。

選択体系理論ではコンテキストは三つの要素からなると考えられている。即ち「活動領域」(field)、「役割関係」(tenor)、及び、「伝達様式」(mode)の三つである (Halliday and Hasan, 1985 : 12)。「活動領域」とはテキストに書かれている、あるいは、話されている内容、あるいは、その言語活動が行われている場面で起こっていることであり、「役割関係」とは当該の言語活動に参加している話し手（または書き手）と聞き手（または読み手）の間の社会的役割関係のことであり、更に、「伝達様式」とはテキスト自体の性質（例えば、話し言葉であるか、書き言葉であるかといった性質）のことである (Halliday and Hasan, 1985 : 12)。本稿では「役割関係」に焦点を当てカタカナ語の機能を解明する。ただし、Halliday and Hasan (1985)の役割関係の分類では不十分なので、Martin (1992)の分類を採用し、更に新しい尺度「形式」度及び「意味内容」を付け加えることにする。

Martin (1992 : 526–528) は、「役割関係」は「地位」(status)、「接触」(contact)、「情動」(affect) という三つの側面があるとしており、本稿ではこの役割関係の分類を採用する。新しい尺度の「形式」度だが、カタカナ語が用いられる場面の形式度を測る必要があるために付け加えられた尺度である。これらの分析結果は更に「カタカナ語の機能の観点からの検討」が加えられ、カタカナ語の対人関係の維持・構築に果たしている役割の解明へと繋がっていく。

本稿ではカタカナ語が用いられるコンテキストをまずはカタカナ語使用者とその聞き手の間の「地位」の差、日ごろの「接触」頻度、「情動」の度合い、及び、カタカナ語が使用される場面の「形式」度の四つの尺度でデータを類型化するわけであるが、次節でその四つの尺度の説明をしておこう。

4. 2. 四つの尺度

「役割関係」とはテキストを創り出す側とテキストを受け取る側の間の関係を示す。「役割関係」は先述のように「地位」「接触」「情動」「形式」の四つの側面を持つと筆者は考えるが、それぞれの側面は下記のような意味分野を担当する。

- * 「地位」：話し手と聞き手の社会的地位関係。目上、目下、同等の三段階に分類して分析を行った。
- * 「接触」：話し手と聞き手の面識の程度のこと。まずは、面識があるかないかで判定をし、そのうえで、同じ団体（あるいはグループ）に所属しているかないかで分析を行った。
- * 「情動」：話し手と聞き手の親疎関係を測る尺度で、「親しい」「良好」「良好でない」の三つに分類した。話し手が初対面である聞き手との関係を好感が持てる関係だと感じている場合、または、既に知り合いとなっている聞き手との関係を仲が良い関

係だと感じている場合、そのような関係を「良好」と分類した。また、話し手が初対面である聞き手との関係を好感が持てない関係だと感じている場合、もしくは既に知り合いとなっている聞き手との関係を仲が良くない関係だと感じている場合、そのような関係を「良好でない」と分類した。そして、話し手が既に知り合いとなっている聞き手との関係を親しい関係だと感じている場合、そのような関係を「親しい」と分類した。但し、刑式的な状況における「情動」作用に関する質問はアンケートでは割愛した。情動の尺度を入れるとアンケートが長くなりすぎるためである。

* 「形式」：カタカナ語が使われる状況の形式度のこと。その状況が形式的であるか否かで分析を行った。

表 1：「役割関係」の分類

| 「地位」 | 「接触」 | 「情動」 | 「形式」 |
|------|------|-----------|--------------|
| 目上 | 面識有 | 関係が良好 | 刑式的（フォーマル） |
| 対等 | 面識無 | 関係が良好ではない | 非公式（インフォーマル） |
| 目下 | — | 関係が親しい | — |

以下、上記の四つの尺度をどのように用いてアンケートを作成したかを説明する。

まず初めに、カタカナ語が使用される状況を「接触」の点で大別できるようにアンケートを作成した。つまり「聞き手と面識があるかどうか」でカタカナ語の使用実態を大別できるようにした。「接触」の観点で大別した後、「形式」を考慮した。「形式」を確かめた後、三番目の要素は「地位」になる。そして後に「情動」の観点から更に細かい分類が行えるようアンケート作成を行った。分類手順は図 1 にまとめてあり、アンケートの例は論文末に資料にあるのでそれを参照していただきたい。

5. 分析

前節で説明した「役割関係」の分析手順に従って作成されたアンケートを、先述のとおり、20人に対して行った。以下分析結果を紹介する。

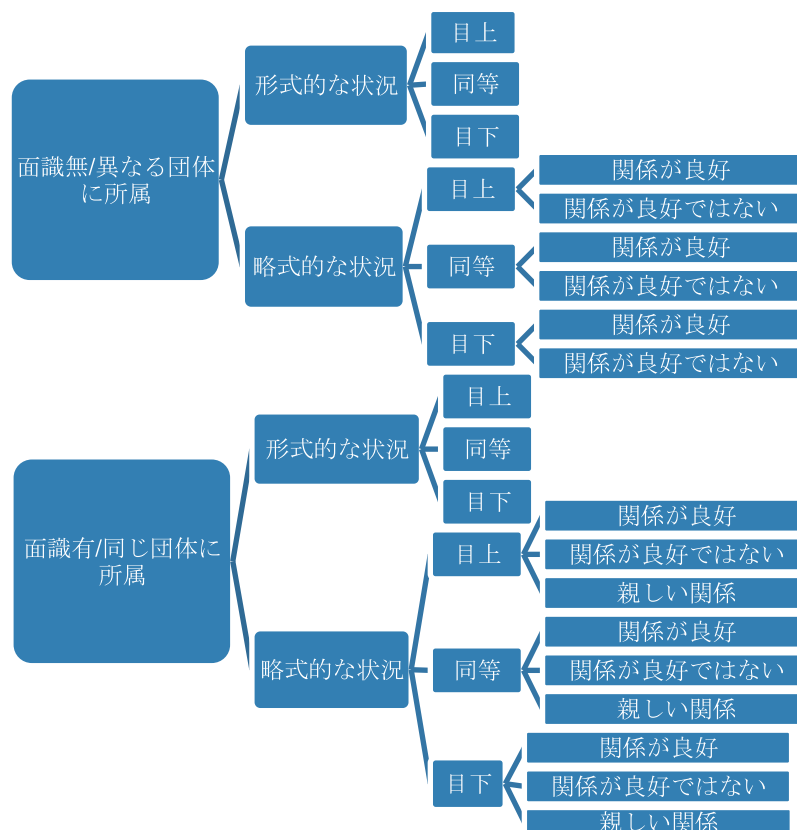
5. 1. 「役割関係」の観点からの分析

アンケートは全部で21問。以下、「面識」、「形式」、「地位」、「情動」の順で分析結果を紹介する。

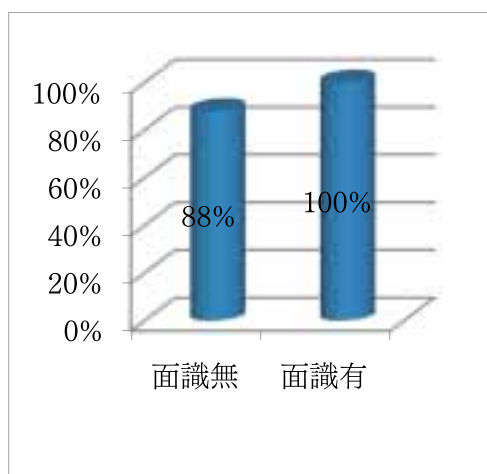
5. 1. 1. 「面識」の尺度からの分析

アンケートの結果によると熟年層の場合、聞き手と面識が無い場合より、面識が有る場合の方がカタカナ語がよく使われている。これに対して、若者層の場合、聞き手と面識があってもなくてもカタカナ語頻度にさほど違いがない。(グラフ 1, 2 参照。)

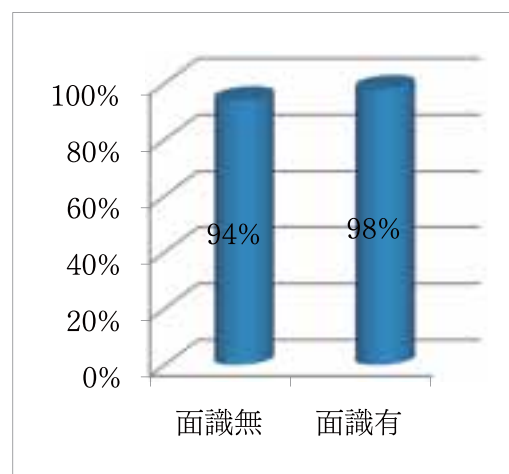
図 1 : 「役割関係」の分析手順



グラフ 1 : カタカナ語の「接触」の点での使い方 - 熟年



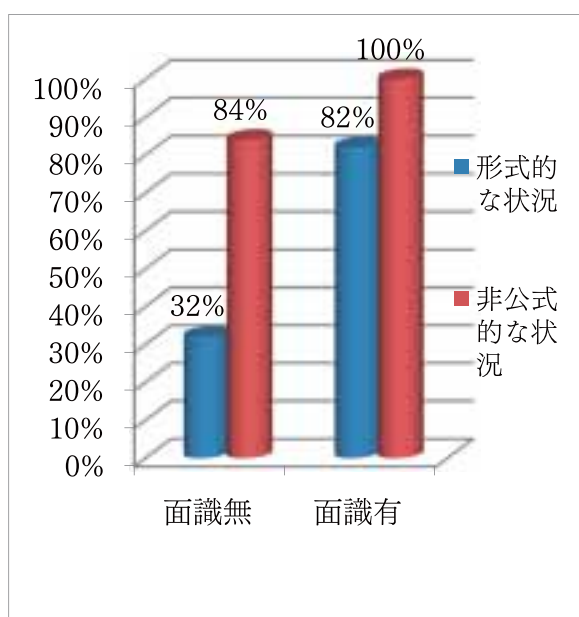
グラフ 2 : カタカナ語の「接触」の点での使い方 - 若者



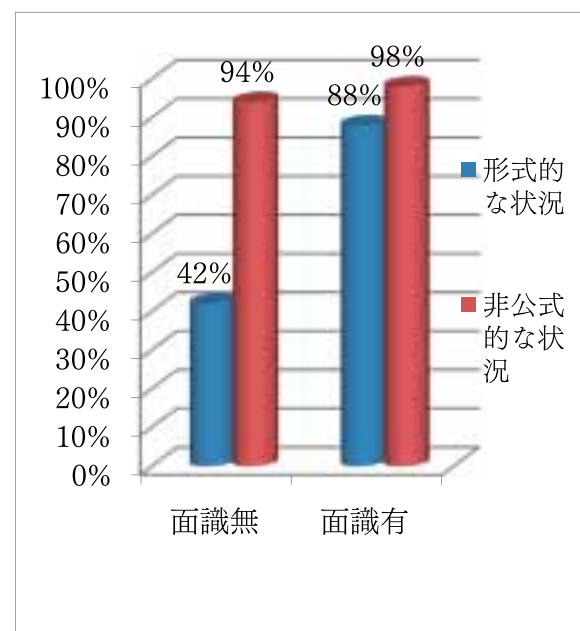
5. 1. 2. 「形式」の尺度からの分析

熟年層は、面識の無い人と接した場合、形式的な状況でカタカナ語を使うと答えた人は少なく32%、非公式な状況の場合で使うと答えた人は84%となっている。一方、面識が有る人に対しては、刑式的な状況でカタカナ語を使うと答えた人は82%だったのに対して、形式的な状況でカタカナ語を使うと答えた人は100%であった。（グラフ3参照のこと。）似たような傾向が若者層にも見られた。面識の無い人と接した場合、形式的な状況でカタカナ語を使うと答えた人は少なく42%、非公式な状況の場合で使うと答えた人は94%となっている。面識のある人と接した場合、形式的な状況下で88%の人が、非公式の状況下で98%の人がカタカナ語を使うと答えている。（グラフ4参照のこと。）

グラフ3：カタカナ語の「形式」の点
での使い方 - 熟年層



グラフ4：カタカナ語の「形式」の点
での使い方 - 若者層



5. 1. 3. 「地位」の尺度からの分析

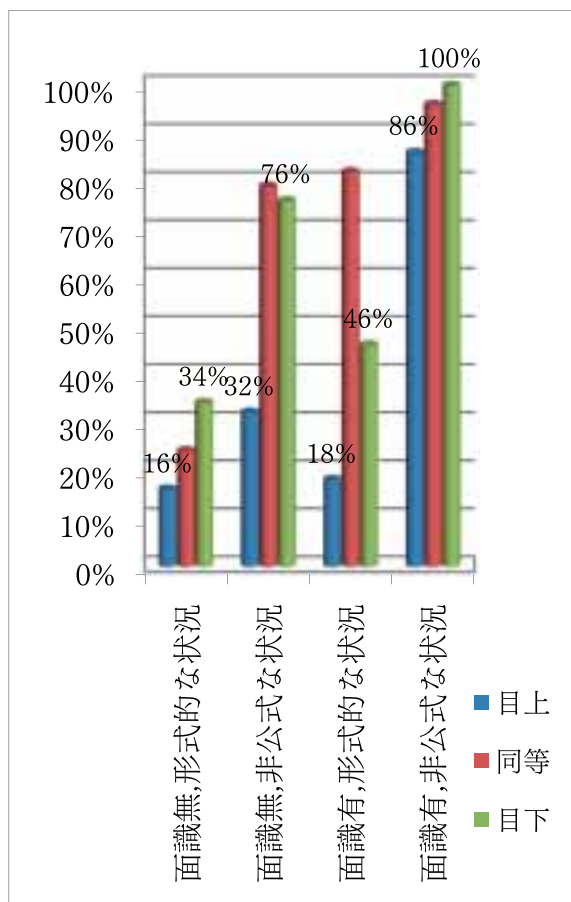
「地位」の点から見れば、熟年層なら、形式的な状況で、面識が無い人と接する場合、目上に対してなら16%、同等な人に対してなら24%、目下に対してなら34%がカタカナ語を使うと答えている。非公式な状況で、面識が有る人と接する場合、目上に対してなら86%、同等な人に対してなら96%、目下に対してなら100%の人がカタカナ語を使うと答えている。カタカナ語の頻度は目下の人と話す場合一番高い。だが形式的な状況では、面識が有る人と話す場合、目上に対してなら18%、同等な人に対してなら82%、目下に対してなら46%がカタカナ語を使うと答えており、非公式な状況では、面識が無い人と接する場合で、目上に対してなら32%、同等な人に対してなら79%、目下に対してなら76%と同等の人に対するカタカナ語の頻度が一番高い。（グラフ5参照のこと。）

若者層なら、カタカナ語は形式的な状況で、面識が無い人と交流する場合、目上に対してな

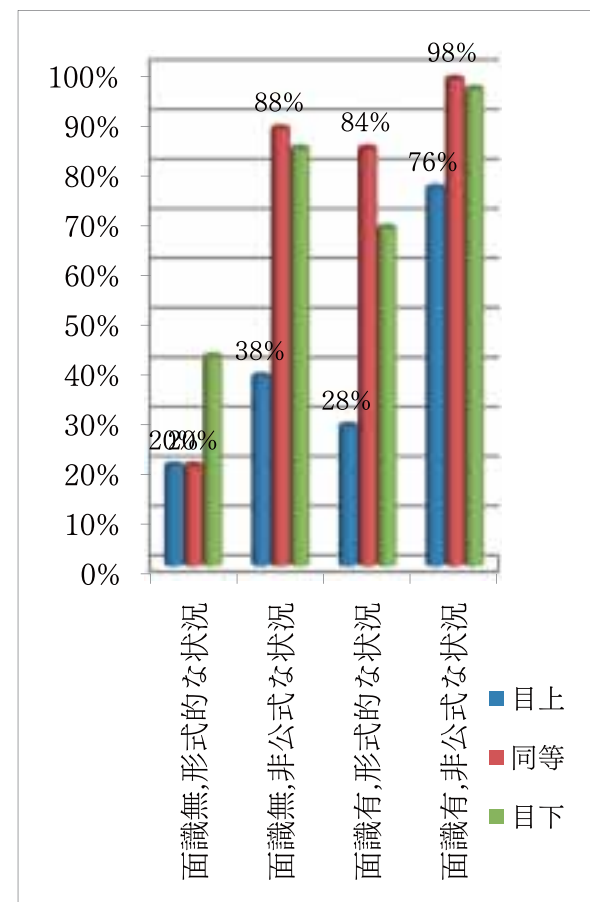
ら20%、同等な人に対してなら20%、目下に対してなら42%、と目下と接する場合に一番多く使われている。

また面識が無い人と非公式な状況で交流する場合、目上に対してなら38%、同等の人に対してなら88%、目下に対してなら84%となっており、非公式な状況の場合、面識が有る人交流する場合、目上に対してなら76%、同等の人に対してなら98%、目下に対してなら96%がカタカナ語を使うと答えている。なお形式的な状況では、面識が有る人と交流する場合、目上に対してなら28%、同等の人の場合84%、目下の場合68%というように同等の人に対して一番多く使われている。(グラフ6参照のこと。)

グラフ5：カタカナ語の「地位」の点
での使い方 — 熟年層



グラフ6：カタカナ語の「地位」の点
での使い方 — 若者層



5. 1. 4. 「情動」の尺度からの分析

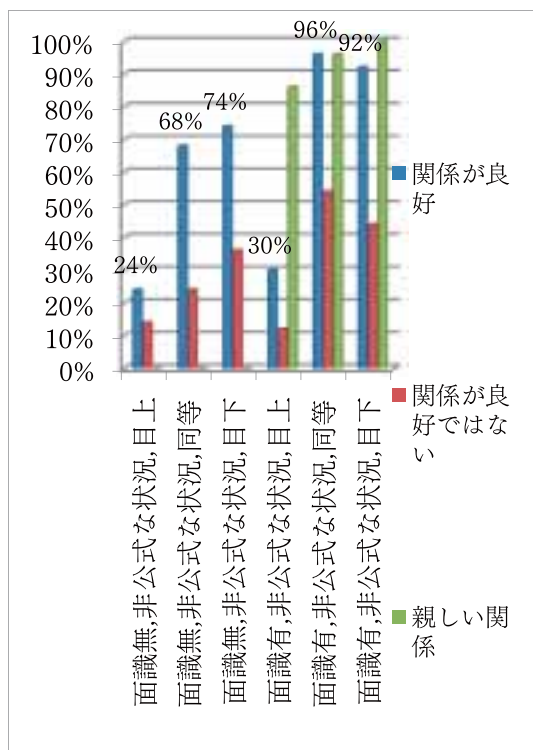
アンケート結果を「情動」の点から見れば、カタカナ語の使用頻度が一番高いのは、熟年層にしても、若者層にしても、関係が良好であると感じる人と接する場合である。例えば熟年層の場合、非公式な状況で面識が有る目下と接する時、関係が良好ではない人に対してのカタカナ語の使用の頻度は44%になり、関係は良好な人に対しては92%、親しい関係である人に対して100%となっている。(グラフ7参照のこと。)

二番目に多くカタカナ語が使われている場合は関係が良好な人と接する場合である。このカ

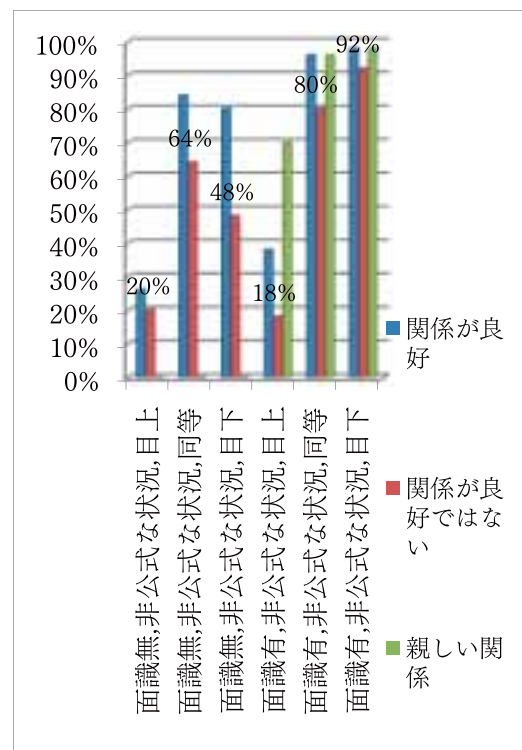
テゴリーでのカタカナ語の使用頻度は親しい関係での頻度を超えることはないが、親しい関係の頻度と等しくなる場合はある。例えば若者層の場合、非公式な状況で、面識が有る同等の人と接する時、カタカナ語頻度は関係が良好ではない場合80%、関係が良好の場合96%、親しい関係がある場合96%となる。(グラフ8参照のこと。)そして関係が良好のカテゴリーは関係が良好ではないカテゴリーの使用率をいつもはるかに上回る。例えば熟年層の場合、非公式な状況で目下と接する場合、関係が良好でなければ、カタカナ語を使用する人は36%になり、関係が良好な人であれば74%になっている。(グラフ7参照のこと。)

関係が良好ではない場合、日本人はカタカナ語をあまり使わないようである。

グラフ7：カタカナ語の「情動」の点
での使い方 — 熟年層



グラフ8：カタカナ語の「情動」の点
での使い方 — 若者層



5. 1. 5. 分析のまとめ

カタカナ語は「接触」の点で面識が有る人と接する場合、「形式」の点で非公式な状況の場合、「地位」の点で同等か目下の人と接する場合、「情動」の点で親しい関係である人と接する場合にもっとも多く使われている。つまり一般的に言えば、カタカナ語は改まった、刑式的な、尊敬を表す状況にはふさわしくないようである。その一方、若者層にしても、熟年層にしても細やかな意思を表す、または仲間意識を強化する状況でよく使われている。また話し相手は地位の点で目下なので敬語について気にしなくてもいい時も使われている。

では、「役割関係」の四つの側面の中でカタカナ語使用に一番強い影響を与えているのはどの側面であろうか。この質問にアンケートの回答結果をグラフにして、上記の四つの側面、あるいは、尺度による変化を比べることによって答えてみる。グラフ9及び10を参照していただ

きたい。これらのグラフは「役割関係」の分析手順（図1）に従って作成されたものである。

まずこの二つグラフが何を分析しているのかを説明をする。グラフ9, 10は三つの軸を持っている。p軸はカタカナ語の使用頻度を表す軸である。q軸は「役割関係」の四つの尺度を示す軸である。「A」は「接触」を、「B」は「形式」を、「C」は「地位」を、「D」は「情動」を示す。そしてr軸上には「役割関係」の可能な組み合わせ（21通り、この組み合わせを以下「帯」と呼ぶ）が、q軸に呼応する形で並べてあり、四つの尺度「A」、「B」、「C」、「D」の数値を帯で結んでいる。このグラフの長所は、上記四つの尺度のうちどの尺度がカタカナ語の使用に最も大きな影響を及ぼしているかが判定できる点にある。見方を簡単に説明しよう。例えば、グラフ9の一番奥の帯を見ていただきたい。聞き手と面識がない場合でもカタカナ語を使うと答えた人の割合は88%であるが、その割合は形式的な状況になると割合は一挙に32%に下がることが分かる。この数値は目上の人と接する場合には更に16%に下がる¹。この場合に限って言えば、カタカナ語使用に最も大きな影響を及ぼしているのは「形式」の尺度であると考えられる。

ではグラフ9（およびグラフ10）の詳しい説明をしよう。

熟年層の場合、グラフの傾斜は21の帯のうち4つの帯で「形式」の所で一番鋭くなっている（帯1, 2, 3, 12）。この点でこの4つの帯に関して言えば、「形式」の尺度がカタカナ語使用に一番大きな影響を及ぼしていると考えられる。残りの帯のうち6つの帯で「地位」の尺度が一番大きな決定因子であり（帯4, 5, 10, 11, 15, 21）、5つの帯では「接触」の尺度が一番大きな決定因子であり（帯6, 8, 16, 18, 19）、最後の6つの帯の場合「情動」の尺度が一番の決定因子である（帯7, 9, 13, 14, 17, 20）。これらの結果により、熟年層にとってカタカナ語の言葉選びに一番大きな影響を与えている要因は、話し相手との地位関係「地位」と「情動」であると考えられる。二番目に影響が強いのは話し相手と面識があるかどうかについての意識（「接触」）で、一番影響が弱いのはカタカナ語を使う状況が刑式的かどうかについての意識（「形式」）であると考えられる。（グラフ9参照のこと。）若者層の場合、4つの帯（帯1, 2, 3, 10）で「形式」が、6つの帯（帯4, 5, 8, 10, 11, 15）で「地位」が、7つの帯（帯6, 7, 9, 13, 14, 17, 20）で「情動」が、そして4つの帯（帯16, 18, 19, 21）で「接触」がカタカナ語使用に最も大きな影響力を及ぼしていると考えられる。まとめると、若者層の場合、カタカナ語の言葉選びに一番影響を与えているのは「情動」で、二番目は話し相手との社会的「地位」の差、三番目は相手と面識があるかどうか（「接触」）と状況の刑式度（「形式」）であると言えよう。（グラフ10参照のこと。）

5. 2 カタカナ語の機能の観点からの分析

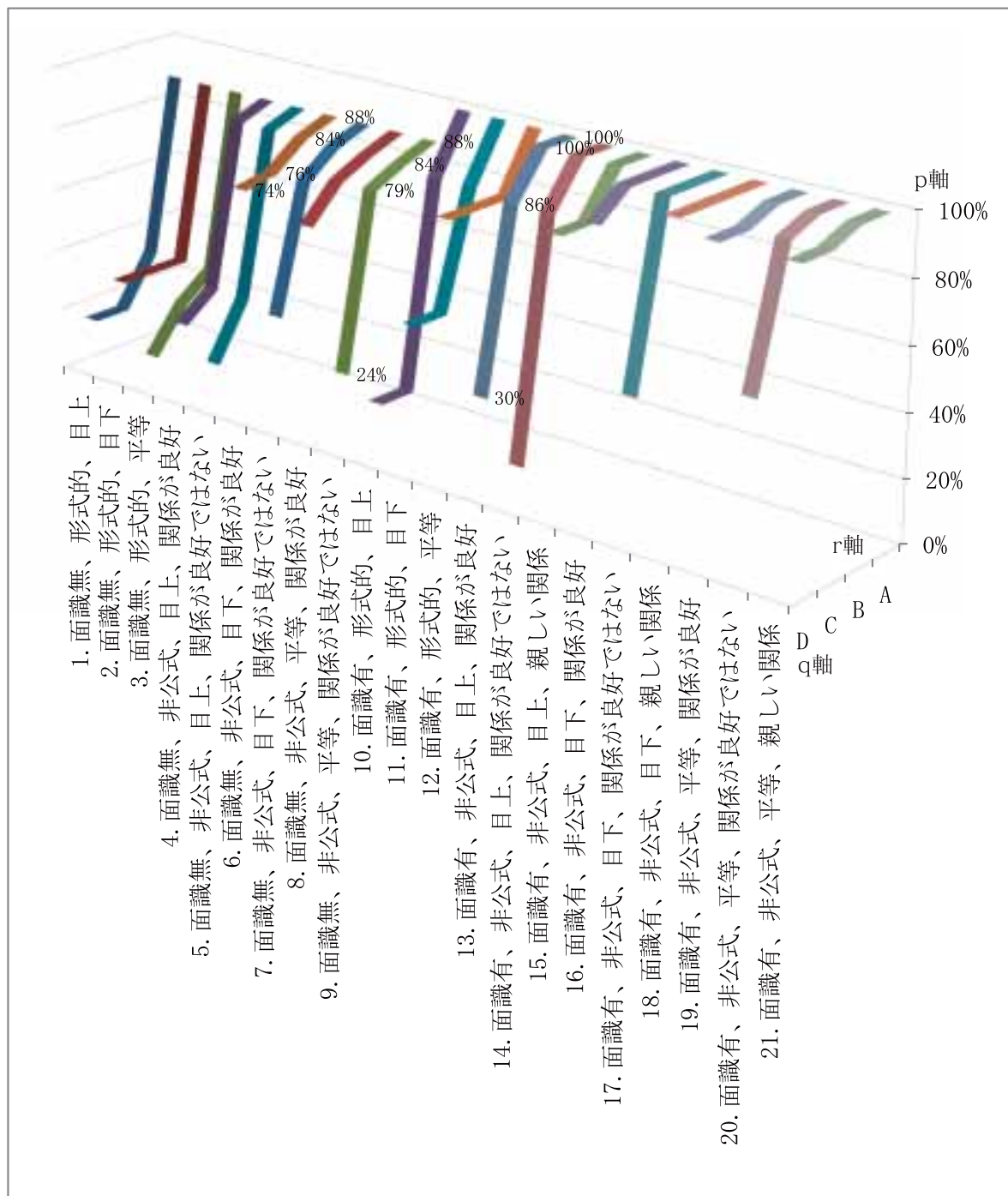
最後に、カタカナ語の使用頻度をカタカナ語の機能の観点から検討してみる。

5. 2. 1. カタカナ語タイプ

アンケート用紙に具体例として示したカタカナ語をその機能で分類すると下記のように5種類に分類できる。²

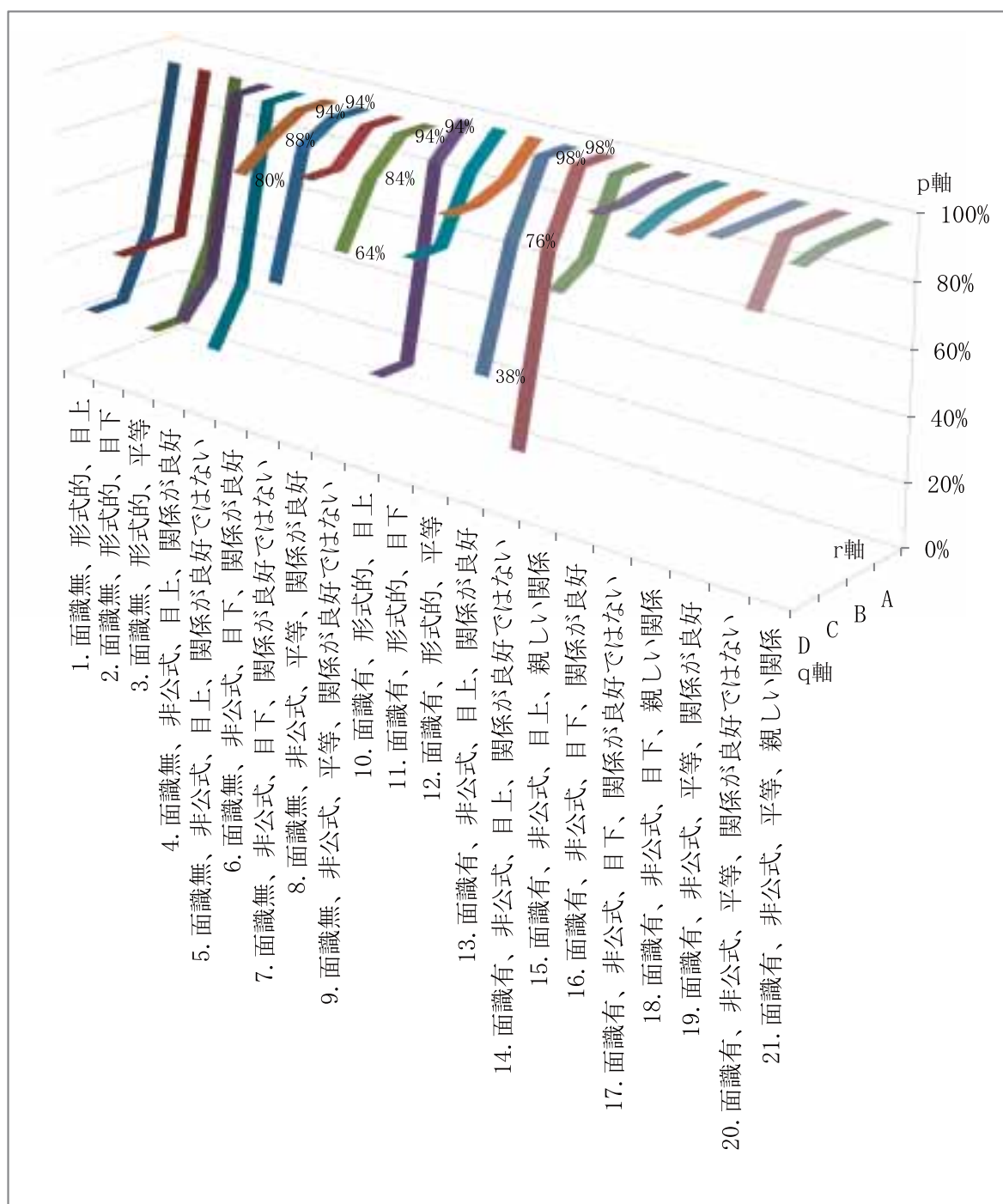
- (ア) お礼を表すカタカナ語
- (イ) 挨拶を表すカタカナ語
- (ウ) 物事の名前としてのカタカナ語
- (エ) 気分や判断を表すカタカナ語
- (オ) 相手の言動に対するコメントを表すカタカナ語

グラフ9：「役割関係」の四つの尺度の言葉選びに与えている影響 — 熟年層



¹ 形式的な状況に関しては「情動」の観点からの分析は行わない。これは4. 2で呼べたとおりである。
² アンケートは21の質問からなり、それぞれの質問には7つの選択肢が与えられているが、その7つの選択肢うち5つは下記の五つのカタカナ語の使用を問う質問となっている。

グラフ10：「役割関係」の四つの尺度の言葉選びに与えている影響 — 若者



上記分類によるカタカナ語の使用頻度を熟年層および若者層で割出してみると表3、4のようになる。³

³ 下記の頻度計算は、上記5種類のカタカナ語使用を問う（21のアンケートの質問に使用されている）選択肢を、何人のアンケート回答者が選択したかで算出されている。例えば、表3の「お礼」で説明すると、アンケート全21問中、お礼を表す手段としてカタカナ語選択すると答えた人が平均で31%になることを示している。

表3：熟年層のカタカナ語分類別使用頻度

| カタカナ語タイプ | お礼 | 挨拶 | 物事の名 | 気分・判断 | 相手に対する コメント |
|----------|-----|-----|------|-------|----------------|
| 使用率 | 31% | 40% | 91% | 44% | 41% |

表4：若者層のカタカナ語分類別使用頻度

| カタカナ語タイプ | お礼 | 挨拶 | 物事の名 | 気分・判断 | 相手に対する コメント |
|----------|-----|-----|------|-------|----------------|
| 使用率 | 49% | 50% | 98% | 58% | 46% |

熟年層にしても、若者にしても、物事の名を呼ぶのにカタカナ語は一番よく使われている。その理由を考えてみれば、日本語に定着している外来語は非常に多くて、外来語でしか表せない言葉はかなり沢山ある。だから、場合によっては、物事の名前としての外来語を使わないわけにはいかない。例えば、パソコンの分野。物事の名前としてのカタカナ語を使わないと選んだ回答者も、「出来れば、避けたい」という意味で選んだだろう。

二番目によく使われているカタカナ語のタイプはどの年齢層も「気分・判断」を表すカタカナ語である。カタカナ語の「気分・判断」を表す手段としての機能はかなり大切である。なお、細やかな意思を伝え、仲間意識を強化したり維持したりする役割は、特に「気分・判断」を表すカタカナ語を通じて現わされていることは明るくなった。

また、熟年層の場合「コメント」や「挨拶」のカタカナ語も、若者層の場合「挨拶」と「お礼」のカタカナ語もよく使われており、以上のカタカナ語タイプも細やかな意思を伝え、仲間意識を強化したり維持したりしているようだ。

6. まとめ

「役割関係」の分析によって、日本人はカタカナ語を誰に対して使うかが分かってきた。若者層も熟年層も、親しい、または、良好な関係にある同年の友達と話す場合、カタカナ語を遠慮せず使う。その際、状況が刑式的か非公式かはあまり関係ない。だが、熟年層の場合、面識のない人と接する時、地位の点で同等か目下の人でも、関係が良好でもカタカナ語の使用率は低くなる。若者層は面識が無い人に対しても、その人と好感が持てたら、カタカナ語をよく使う。その一方熟年層も、若者層も関係が良好ではない人と話す場合、カタカナ語をあまり使わない。まして、関係が良好ではない目上の人なら、使われているカタカナ語の数は非常に少なくなる。関係が良好でも、親しくても日本人は目上の人に対してカタカナ語を慎重に使う。

つまり、聞き手との関係が近ければ近い程カタカナ語は使われているが、熟年層でも若者層でも「情動」と「地位」がカタカナ語の使用に最も大きな影響を及ぼしていると考えられる。

更に「地位」の点でいえば、目下または同等の人に対してはカタカナ語が一番使われている。

結論として、熟年層にとっても、また、若者層にとっても、カタカナ語は、気軽で細やかな雰囲気を作り出し、仲間意識を強化することを通じて、友好的な対人関係を構築・維持するという機能を果たしている。

そしてカタカナ語の機能の観点から見れば、熟年層にしても、若者層にしてもそういう気軽な、細やかな印象と「団結力」が特に「気分・判断」を表すカタカナ語を通じて伝えられている。

資 料

アンケートサンプル1

あなたは以下に書いてある、どのカタカナ語を用いますか。

質問の下に書いてある解答の中から妥当なカタカナ語のグループを選んで、グループの番号を丸で囲んでください。複数解答も可能です。解答の中に妥当なカタカナ語のグループが無い場合、または、リストに書いてある以外で他のカタカナ語を使用している場合、その表現を「他のカタカナ語」の欄に書いてください。

面識無い場合

形式的な状況 （会議、法廷、演説、など）問題①～③

① 同等な人と話す場合、例えば：会議で社員として別の会社の社員と話す時

- (ア) この場合カタカナ語を用いません
- (イ) お礼を表すカタカナ語「サンキュー／など」
- (ウ) 挨拶を表すカタカナ語「バイバイ／など」
- (エ) 物事の名前として用いられているカタカナ語「テキスト／ペース／ハンドル／
ピンチ／ケア／チャンス／など」
- (オ) 気分・判断を表すカタカナ語「ラッキー／ハッピー／ファニー／など」
- (カ) 相手の言動に対するコメントを表すカタカナ語「ドンマイ／オッケー／ラジャー／など」
- (キ) 他のカタカナ語：

② 目上の人と話す場合に、例えば：あなたは社員で、自社を訪れた他の会社の社長と話す時

- (ア) カタカナ語を用いません
- (イ) お礼を表すカタカナ語
- (ウ) 挨拶を表すカタカナ語
- (エ) 物事の名前として用いられているカタカナ語
- (オ) 気分・判断を表すカタカナ語
- (カ) 相手の言動に対するコメントを表すカタカナ語
- (キ) 他のカタカナ語：

参考文献

小林千草.(2009).『現代外来語の世界』 朝倉書店.

国立国語研究所.(2006).『外来語と現代社会』 東京国立印刷局.

Martin, J.R.(1992). *English Text: System and Structure*. Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Halliday, M.A.K. and Hasan, R.(1985). *Language, context, and text: Aspects of language in a social-semiotic perspective*. Victoria: Deakin University Press.